

2025.4.6.

「礼拝を捧げる民として」

旧約 創世記 12章 1～7節 新約 ヨハネによる福音書 4章21～26節

1. はじめに

4月からこの教会の牧師として赴任してまいりました小堀と申します。今日が皆さんと一緒に捧げる初めての主の日の礼拝となります。まだ数名の方のお顔と名前しか知りません。名前とお顔を覚えるのにしばらく時間がかかるかと思いますが、宜しくお願ひします。今朝、皆さんとお会い出来ることを、とても楽しみにしてきました。宮崎にいる主にある兄弟姉妹である皆さんと、これから一緒に御国への旅をしていきます。旅の途中で色んなことがあるかと思いますが、主が道を示してくださり、共に歩んでくださいますから、安心して、互いに支え合い、仕え合って歩んでまいりましょう。

今朝与えられております御言葉は、アブラハムが神様から召命を受けて、最初の神の民として旅を始めた場面です。ここには、神の民とは如何なるものであるかということが、ハッキリ示されています。4つの点で見えていきます。

2. 神の民 ①旅する民

第一に、神の民は「旅する民」だということです。この最初の神の民、信仰の父アブラハムは、この時から旅を始めました。そして、生涯旅を続けました。しかし、生涯旅をしたのはアブラハムだけではありません。イサクもヤコブも旅をしました。そして、旧約において旅と言ってすぐに思い起こしますのは、モーセに率いられたイスラエルの荒れ野の40年の旅でしょう。この旅の途中で、神の民は十戒をはじめとする律法を与えられました。食べるものにも、水にも事欠くようなとても困難な旅でした。神様はその旅の間中マナをもって養い、雲の柱・火の柱をもって導き続けました。そして、神の民は約束の地へと入りました。新約においては、何よりもイエス様御自身が公の生涯において、弟子達と共に旅をされました。町から町へ、村から村へと弟子達と旅を続けて福音を宣べ伝えられました。使徒パウロも旅をしました。パウロの3回の伝道旅行について、使徒言行録は多くのことを語っています。聖書に記されているだけではありません。代々の聖徒たちも旅をしました。西ローマ帝国の聖徒たちはゲルマン民族の人たちに福音を伝えるために旅をしました。そして、東ローマ帝国の人たちはスラブ民族の人たちに福音を伝えるために旅をしました。更に、全世界に福音を伝えるために、多くの宣教師達が旅を続けました。そして、156年前に来日したヘンリー・スタウトというアメリカ改革派教会の宣教師が長崎で伝道し、その福音は鹿児島へ、更に都城へ、そして宮崎へと福音が伝えられてきて、この宮崎中部教会があるわけです。2019年にこの教会が作られた『宮崎中部教会の伝道事始めを探る－旧日本基督教会鎮西中会との関わりで－』という本に記されています。ちなみに、

この宮崎の地に福音が最初にもたらされたのは 1879 年 6 月のことですから、146 年前ですね。つまり、150 年前にこの宮崎の地にはキリスト者は一人もいなかったんです。実に、キリストの福音はこの「旅する神の民」によって世界中に伝えられてきました。そして、今も伝えられ続けています。

しかし、すべての神の民が旅をするわけではない、と思われる方もいるでしょう。その通りです。その土地に根を張って福音を宣べ伝え、教会を建ててきた人たちがほとんどです。皆さんの中には、ずっとこの宮崎中部教会で信仰の歩みをして来た方もおられるでしょうし、他の教会から移ってこられた方もおられるでしょう。現代においては、生涯一つの教会で信仰の歩みをする人の方が少ないでしょう。私も教会生活としては、この宮崎中部教会で 4 っ目です。それは「旅する神の民」としては、当たり前のことです。しかし、この「旅する神の民」の旅は、地理的な移動、地面の上を移動することだけを意味しているわけではありません。「神の民」は、たとえ生涯生まれた土地から一度も離れたことがなかったとしても、「旅する神の民」の一人です。それは、この旅が時間を旅することをも意味しているからです。時間を旅すると言っても、タイムトラベラーという意味ではありません。「時間を旅する」というのは、少し分かりにくい表現かもしれません。しかし、これが「旅する神の民」の本質です。私共は「今週も神様の御心に適った歩みが出来ますように」というような祈りをするでしょう。その場合に「歩む」というのは、地面を歩くということの意味してはいないでしょう。生活する、生きる、そういう意味で「歩む」と言っているわけです。つまり、「旅する神の民」とは、ある状況、ある世界に向かって生きる民だ、生活する民だということです。その目指す状況、目指す世界、それは神の国です。天の御国です。私共は天の御国を目指して、イエス様が再び来られる日を目指して、そこに向かって歩んでいる民だということです。アブラハムもそうでした。ヘブライ人への手紙 11:16 では「彼ら（アブラハム・イサク・ヤコブのこと）は更にまさった故郷、すなわち天の故郷を熱望していたのです。」と告げられています。つまり、アブラハムは天の故郷を目指して旅を続けたのです。

3. 神の民 ②召命を受けた民

第二に、神の民は神様からの召命を受けた民、神様によって召し出しを受けた民だということです。アブラハムは「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。」と、神様に告げられて、その神様の言葉に従って旅に出ました。アブラハムは旅が好きだから、旅を続けたわけではありません。神様が「私の示す地に行きなさい」と命じられ、それを受け入れ、それに従っただけです。神の民の始まりは、この神様の選びとそれに基づく召し出しによって始まりました。それは、いつの時代の、どこの神の民も同じです。モーセもダビデもイザヤもエレミヤも、そしてイエス様の弟子達も、みんなそうでした。私共も同じです。私が神様を選んだのではなくて、神様が私共一人一人を選んでくださって、召し出してくださり、招いてくださり、神の民に加えてくださいました。どうして私共が選ばれたのか、その理由は分かりません。神様がお選びになったのですから、神様には

理由があるのでしょうけれど、私共には分かりません。少なくとも、他の人よりも心が綺麗で、良い人で、信仰深い人であったから、というわけではないということは、私にも分かります。私共が召し出され、神の民とされ、救いに与った理由。それは、私共の中にはありません。それが「神様の選び」というものです。これは神様の恵みとしか言いようが無く、ただただありがたく、感謝をもって受け取るしかありません。

私が今回宮崎中部教会に転任するに当たり、たくさんの人から「どうして？」と聞かれました。「家族がいるの？」「親戚がいるの？」「いや、特に知っている人はおりません。」と応えると、不思議な顔をされました。でも、私にとっては何の不思議もありません。この宮崎中部教会からの招聘を、神様からの召命として受け取った。それだけのことです。私は神学校を卒業して京都の東舞鶴教会に遣わされました。舞鶴に知っている人は一人もおりませんでしたし、舞鶴という町も知りませんでした。17年間そこで仕えて、富山鹿島町教会に転任した時も、富山に知っている人は一人もおりませんでした、富山に行ったこともありませんでした。21年間そこで仕えて、今回転任するに際しても、同じことです。転任が決まって、昨年9月にこの教会を訪ねたのが、宮崎の地に来た最初です。アブラハムが「私が示す地に行きなさい」と神様に告げられて、それに従ったのと同じです。ですから宮崎については何も知りません。何でも教えてください。でも、知らない土地での生活に対する不安は全くありません。神様が召されたのですから、神様が何とかしてくださいませ。それは間違いありません。それに、ここには「主にある兄弟姉妹」がいます。神の家族がここにはいます。何も心配することはありません。正直に申しますと、38年前に舞鶴に遣わされた時はかなり不安でした。21年前に富山に転任した時も、少し不安でした。しかし、今回は全く不安がありません。38年間、主がすべてを備えてくださるということを知られ続けてきたからです。召命を受けた神の民として生きるとは、この主の御手の中にある安心を与えられて、主にある兄弟姉妹との美しい交わりの中で生きるということなのでしょう。

4. 神の民 ③約束を与えられた民

第三に、神の民とは「神様から約束を与えられた民」だということです。神様はアブラハムに「あなたは生まれ故郷／父の家を離れて／わたしが示す地に行きなさい。」とお命じになりましたけれど、同時に約束も与えられました。この約束は3つありました。一つは「12:2 わたしはあなたを大いなる国民にし」とありますが、これは「子孫の繁栄の約束」です。二つ目は「あなたを祝福し、あなたの名を高める／祝福の源となるように。 12:3 あなたを祝福する人をわたしは祝福し／あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて／あなたによって祝福に入る」とありまように、「すべての民が祝福を受ける約束」です。更に7節には、神様が「あなたの子孫にこの土地を与える」と約束されたことが告げられています。これは、「土地を与える約束」です。つまり、①「子孫の繁栄の約束」②「すべての民が祝福を受ける約束」③「土地を与える約束」、この三つの約束をアブラハムは与え

られました。そして、彼はそれを信じて生きた。生き抜いた。これが神の民です。この三つの約束はアブラハムが生きている間、全くと言って良いほど、ほとんど実現していません。「子孫繁栄の約束」にしても、100歳になってやっとイサクが与えられただけです。たったの一人です。「空の星ほど」にはほど遠いでしょう。「土地を与える約束」については、アブラハムがその生涯で手に入れた土地は、妻であるサラのお墓の土地だけです。「すべての民が祝福を受ける約束」に至っては、イエス様が来られるまで実現されませんでした。つまり、アブラハムが生きている間、神様の約束は少しも実現されるようには見えなかったのです。そうであるにもかかわらず、なおアブラハムは信じて歩み続けた。だから「信仰の父」なんです。

私共も神様からの約束を与えられています。イエス様を神の御子として信頼するならば、一切の罪を赦していただき、神の子としていただける。どこにいても、何をしても、どんな状況の中でも、神様は共にいてくださる。イエス様が再び来られる時、私共も復活の体をいただき永遠の命に生きる。そして、この世界はやがてまことの平和に満たされる。このような約束は、傍から見ればただの絵空事のように聞こえるでしょう。そんな世界がどこにある。あなたのどこが神の子なのか。永遠の命なんてあるわけが無い。そう言われるかもしれません。しかし、私共はそれを本気で信じて、この地上での歩みを為しています。それは、既にその約束が私共の歩みの中で、様々なあり方で、この約束は本当のことだ、神様は生きて働いておられるといことを知らされているからです。神様の約束は絵空事ではないことを知らされているからです。では、私共はそれをどこで知らされているのでしょうか。神様は自由なお方ですから、それこそあらゆる時に、あらゆる状況の中で、神様は自らの業をなさり、御言葉を与えてくださいます。しかし、その様な機会は、何と言ってもこの礼拝です。

5. 神の民 ④礼拝する民

アブラハムは神様の召しに従って旅に出て、何をしたでしょうか。7節を見ますと「**12:7 主はアブラムに現れて、言われた。『あなたの子孫にこの土地を与える。』**アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。」とあります。又8節では「**12:8 アブラムは、そこからベテルの東の山へ移り、西にベテル、東にアイを望む所に天幕を張って、そこにも主のために祭壇を築き、主の御名を呼んだ。**」とあります。ここで、「**祭壇を築いた**」という言葉が繰り返されています。これは、私共の分かる言葉に言い換えますと「礼拝した」となる言葉です。つまり、アブラハムは旅を続けながら、礼拝し続けたということです。神の民とは「礼拝する民」です。これが第4の点です。この礼拝において、私共は神様と出会い、神様の言葉を受け、神様を拝みます。この礼拝において、私共は「神の国の先取り」をしています。御国において私共は何をするのでしょうか。礼拝です。「酒はうまいし、姉ちゃんは綺麗だ」というようなイメージで聖書は天の御国を告げてはいません。聖書が告げる神の国は、みんなが神様を礼拝し、神様との親しい交わりを与えられ、互いに愛し合い、支え合い、仕え合う、そういう所です。私共は、その御国に憧れ、その御国を目指して、この地上で生きて

いる。旅を続けているわけです。

ヨハネによる福音書において、イエス様は「4:23 しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。4:24 神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」と告げられました。私共はその「霊と真理をもってなされる礼拝」に与っています。それは、父なる神様に対して「父よ」と呼び、子なるキリストに向かって「主よ」と呼び、聖霊なる神様が導き、御支配してくださる礼拝です。この礼拝に御国が写し絵のように現れています。御国において、私共は神様と顔と顔とを合わせるようにして交わり、主を賛美します。その賛美は誰も聞いたことが無いような素晴らしいものです。代々の作曲家や演奏者は、この御国における賛美を想い、曲を作り、演奏してきました。そして、何よりも私共自身が、イエス様に似た者に変えられます。御国は完全にはまだ来ていません。しかし、全く来ていないわけではありません。こう言っても良いでしょう。神の国はイエス様と一緒に既に到来しました。しかし、まだ完成されていません。それが完成されるのは、イエス様が再び来られる時です。私共は父・子・聖霊なる神様との交わりを与えられ、そこに生きている。それを私共はこの礼拝において既に味わっているわけです。私共は罪人でなくなったわけではありません。言わんで良いことを言ってしまうたり、してはならないことをしてしまったりします。でも、神の子とされています。神様に赦され、愛され、生かされています。神様は、今日も私共一人ひとりに語りかけてくださいました。何とありがたいことかと思えます。

私共は今から聖餐に与ります。この聖餐において、私共はキリストの体を食べ、キリストの血を飲み、キリストと一体とされている恵みを味わいます。これは荒野を旅する私共に与えられているマナです。この食事に養われつつ、天の御国を目指しつつ、遣わされている場において為すべきことを為し、一日一日神の民として健やかに歩んでまいりたいと願います。

祈ります。

恵みと慈愛に満ちたもう、全能の父なる神様。

今朝、あなた様は御言葉を通して、私共神の民が、如何なるものであるかを教えてくださいました。感謝します。あなた様は私共一人ひとりを選び、あなた様の子として召し出してくださいました。そして、私共が思ってもいなかった驚くべき救いに与らせてくださいました。まことにありがたく感謝いたします。どうか、私共が喜びと感謝をもって、御国に向かって、与えられた約束を信じ、健やかに神の民として 歩んで行くことが出来ますよう、心から祈り願います。聖霊なる神様がすべてを守り、支え、整えてくださいますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン